

『ファウスト』におけるオイフォーリオン悲劇について

中谷博幸

I

同じ悲劇でも、『ファウスト』¹⁾は、シェークスピアやソフォクレスのように、筋書きのおもしろさによって人をぐいぐいとひきずりこむようなことはない。では、『ファウスト』のおもしろさはどこにあるのか。『ファウスト』はなによりも詩劇なので、それをドイツ語で朗読したり聴いたりすることによって、得られるものであろう。しかし、ここでは別の面から考えてみたい。『ファウスト』のポリフォニー的性格である。ゲーテは、『ファウスト』の特定の登場人物をあらゆる場合に肯定的に描くことをしない。それぞれの人物が、その時々互いを制約し合う。以下ではそのようなポリフォニーのおもしろさ²⁾を、第二部で描かれるオイフォーリオン悲劇を中心に、少しばかり例示したい。

まず、オイフォーリオン悲劇について、簡単に触れておこう。第二部で、ファウストは古代ギリシアでもっとも美しいとされたヘレナと結婚し、息子オイフォーリオンをえた。この三人の家庭は、ヘレナにとって「神にも似た至福の喜び」(9701行)であり、ファウストにとって「欠けたものはなにもない」(9703行)状態にあった。ファウストはこの家庭の幸せが「変わることなく、ずっと続いてくれればよいが！」(9706行)と願う。トロイアの女たちからなる合唱は「愛し合う長い年月の美しい思いが／この子の穏やかな輝きになって／おふたりの許に実を結んだのです。／三人一緒のお姿に 心が深く揺さぶられます。」(9707-9710行)とうたった。しかし、少年オイフォーリオンは、「世界の空の 果ての果てまで 高く高く昇っていく」(9713-15行)ことを願う。「墜落して身を滅ぼす」(9719行)ことを案じる両親の心配をよそに、オイフォーリオンは、岩から岩へとより高く登り、より遠くを見渡す。彼の姿は、やがて武器をおびた青年にかわる。そして遂にオイフォーリオンは背中の中を二枚の翼を開き、「空中へ身を踊らせる。衣裳が暫し彼を支え、浮かばせる。彼の頭からは輝きが発し、飛ぶあとに光が尾を引く。」しかしそのあと、両親の不安は現実となり、オイフォーリオンは、イカルスのように墜落して、死んでしまう。以上がオイフォーリオンの悲劇のあらましである。

II

オイフォーリオンについては、ゲーテ自らが、エッカーマンとの対話において、1827年7月5日と1829年12月20日の二度わたり、語っているので、それに耳を傾けてみよう。まず後者から考えてみたい。『ファウスト』第二部第一幕のカーニヴァルにおける仮装行列の場面で登場する少年御者についてである。その日、ゲーテとエッカーマンとの会話は、演劇のある上演の話から『ファウスト』に話題が移り、仮装行列の場面が話題となった。その時ゲーテは、「ファウストがプルートの仮面の中に隠れており、メフィストーフェレスが客奮の仮面の中に隠れている」が、少年御者の中に隠れているのは、オイフォーリオンだと言った。これに対してエッカーマンは、「どうしてそれが、このカーニヴァルの場の中に顔を出すことができるのでしょうか？それは第三幕になってやっと生まれるのですから。」と述べた。これに対してゲーテは、「オイフォーリオンは人間ではなく、たんなるアレゴリー的な存在にすぎない。どんな時間にも、どんな空間にも、どんな人間にも、いっさい拘束をうけない詩Poesieが、彼の中に擬人化されてい

る。後になって好んでオイフォーリオンの姿をとるようになったと同じ精神が、今ここでは少年御者となってあらわれている」³⁾と答えた。

『ファウスト』第二部第一幕の5065行以下5986行まで、皇帝宮殿の大広間で繰り広げられるカーニヴァルの仮装行列が描かれる。先触れを進行役にして、庭園の花守娘たちから始まって、実もたわわなオリーブの枝、薔薇の蕾、イタリア風道化など、次々と様々な人物が登場してくる。途中からは古代ギリシア神話の女神たちが近代風の仮面を付けてあらわれる。そして「四頭立ての立派な馬車が 大勢の間を通り抜けて」(5512行) やってくる。そこに乗っているのが富の神プルーツ、それを見事に御しているのが少年御者である。少年御者は、自らを、「私は浪費、私は詩だ、詩人だ。」と紹介する。一方、オイフォーリオン悲劇では、合唱が彼に次のように呼びかける。「神聖な詩よ／昇るのだ 天を目指して／輝けよ 美しさの極みの星よ／遠く 遠く 遙かの空で！／それでも詩は私たちに聞こえてくる／いつになっても聞こえてくる／それを聴くのは嬉しいことです。」(9863-9869行) このように少年御者とオイフォーリオンはともに詩と呼ばれる。また、プルーツは少年御者に向かって「少年よ お前こそわが最愛の息子 わが寵愛はお前の上にある。」(5629行) と、福音書⁴⁾をもじって、呼びかける。すでに述べたように、ゲーテがエッカーマンに語ったところによれば、プルーツの仮面の背後にはファウストが隠れていた。さらに、オイフォーリオンと少年御者はともに、上への志向性をもつ。少年御者は天翔る四頭の馬Rosseを操る。一方、オイフォーリオンは後で詳しく述べるように、上へ上へと昇っていかうとする。このように両者の間には共通性と深い繋がりが見られるのである。しかし多くの評者が指摘するように、オイフォーリオンと少年御者を単純に同一視することは危険である。少年御者の役割は、主人プルーツに仕え、彼の名声を誉めたたえる宮廷詩人であり、「その舞踏会や饗宴に生命を吹き込み 飾り立てる」(5578行) 彼は自由な立場にある詩人ではない。また少年御者は、上への志向性をもつと言っても、自由に天翔るのではなく、プルーツに託された「つむじ風のように宙を往く四頭立て」を彼の「意志のままに見事に御し」(5614行)、場所柄をわきまえて制御することができる(5525行)。彼はその名前Knabenlenkerが示すように、何よりも、御する者であり、制御することのできる人間である。これに対してオイフォーリオンは何よりも自由を求める。少年御者には、オイフォーリオンの本質的な性格がそのまま発現するのではなく制御されていると言っているだろう。

しかしこのような存在である少年御者は、仮装行列が進む中で、プルーツによって自由を与えられる。

さあ お前はもう この煩わしい重力の場から解き放たれた。／自由に伸びやかに 自分の領域へもどるがよい！／ここで我らを取り囲むのは 醜悪なるものばかりだ。／お前が気持ちも透明に 貴い透明さの中を見入ることのできる あの領域／自分以外のものに煩わされることなく 自分にのみ自分を委ねられる あの領域／ただ美と善のみがお前の心を悦ばす あの領域／あの孤独なる詩の領域へお前は行くがいい！ そここでお前の世界を創り出すのだ。(5689-5696行)

この時、少年御者は、オイフォーリオンの本質へと展開する可能性を与えられた。しかしこの詩の領域はプルーツ＝ファウストが言うようなバラ色であるのか、そもそもそのような世界の創出は可能なのだろうか。オイフォーリオン悲劇はこのことを考えさせてくれる。そこで次に、1827年7月5日のゲーテとエッカーマンとの対話を取り上げてみよう。

III

ゲーテは『ファウスト』第二部では、オイフォーリオンの墜落について、ト書きで「美しい若者が両親の足元に墜落する。ある知名の人の面影が死者のうちに見て取れると思われる。」と記した。1827年7月5日の対話で、エッカーマンは、それに関連して、「あなたが彼 [バイロン] のため愛の不朽の記念碑をお建てになったのも、至極もつともなことだと思われます。」と述べた。ゲーテはそれを肯定して、「私には、最近の文学を代表する人として、彼以外の人間をとりあげることは考えられなかった。彼が今世紀最大の才能の持主であることは疑いないからだ。それにバイロンは、古代風でもなければ、ロマンティックでもなく、現代そのもののような人物だ。そのような人物が私にはぜひとも必要だったのだ。そのうえ、彼はその満足することを知らない性格と、ミソロンギで身を滅ぼすに至ったあの戦闘的な気質によっても、まさに打ってつけの人物だった」⁵⁾と語った。

ゲーテはここで三つのことを語っている。まず、バイロンが「今世紀最大の才能の人物である」こと。彼はバイロンを高く評価した。第二に、バイロンが「古代風でもなければ、ロマンティックでもなく、現代そのもののような人物」である点。そして第三に、バイロンが、「満足することを知らない性格」の持ち主である点。すでに1825年2月24日のエッカーマンとの対話で、第一の点と第三の点について、詳細に話していた。第一の点については、「私が独創性とよんでいるものに関するかぎり、世界中のだれと比べても、彼に及ぶ者は一人もいまい」⁶⁾と語った。さらに「彼は、偉大な才能を、生まれながらの才能を、もった人だ。詩人らしい詩人としての力が彼ほど備わっている者は一人もないように思われる。外界の把握という点でも、過去の状態の明晰な洞察という点でも、シェークスピアと比肩できるほど偉大だ。」⁷⁾とまで述べた。第三のバイロンの性格については、1825年2月24日の会話では「つねに無限なものを追い求める性格 *stets ins Unbegrenzte strebenden Naturell*」⁸⁾と形容し、この性格と彼の破滅とを関連づけた。たとえば、ゲーテは、エッカーマンに対して次のように語った。

それにつけても、道徳的なものに関して、自分を制御できたらよかったのだが！それをできなかったのが、身の破滅のもとだった。奔放な生き方のために、没落した、といってもいいだろうね。彼はあまりにも自分自身について無知だった。つねに、その日その日を情熱のおもむくままに生き、自分のやっていることなど知りもせず、考えてもみなかった。……彼にとってはどこもかしこも狭すぎた。無制限の個人的自由を享受していたにもかかわらず、自分では息苦しく感じていた。世の中は、彼には、牢獄のようなものだったのだ。ギリシアへ行ったのも、自由意志で決めたわけではなく、世間との軋轢のためにやむなくそうしたまでのことだ。⁹⁾

以上のようなバイロンの評価を念頭においてオイフォーリオン悲劇を読むと、確かに、そこにバイロンに対する哀悼が込められていると推測することができる。オイフォーリオンが死んだのち合唱がうたう次のような葬送の歌は、バイロンのことを想像せずにはいられない。

あなたは一人ではない 何処にいようとも。／私たちはみな あなたが誰か 知っているつもりです／ああ！ あなたは地上から早く別れて行った／だが私たちの心は 決してあなたから離れはしない。／私たちはみなあなたを悼む気持ちになれず／羨みながら あなたの定めを歌うのです。／晴れた日も曇った日も／あなたの歌と勇氣は美しく 偉大でした。／ああ！ 地上の幸福のためにと生まれ／高貴な先祖と大きな力に恵まれながら／青春の花の盛りに奪われて／あまり

に早く失われたあなた！／世界を見通す鋭い眼差し／人の胸の熱い鼓動を聞き取る共感の力／最良の女たちの胸を焦がす魅力／そして他に比を見ないあなたの歌。」(9907-9922行)

また、オイフォーリオンが「地面に縛られる」ことを嫌って(97239724行)、両親の心配をよそに世界の果てにまで昇っていこうとする姿、「断崖 絶壁 岩山が迫り／森の茂みに囲まれた／狭い場所」(9811-9813行)を嫌って岩から岩へと高く登っていく姿は、バイロンの性格を彷彿とさせるものである。多くの注釈¹⁰⁾が、ギリシア独立戦争に参加して病没したバイロンとの関連を指摘している。

オイフォーリオンとバイロンとのそのような関連性を強く主張する研究者の一人に、柴田翔がいる。彼は、オイフォーリオンの物語に三つの寓意をみている。「ヘレナ劇のオイフォーリオンの形象と運命は、ゲーテが家庭において持つことを望んで遂に持ちえなかった輝ける息子の像と運命であり、かつ『美』と『現実』の出会いから生まれる『詩』の寓意であり運命であり、しかもそのまま『詩』を生きた詩人バイロンとその運命でも」¹¹⁾あった。ゲーテの現実の家庭は、幸せなものではなかった。5人の子供のうち4人が嬰兒のうちに死に、残る息子も「自己破壊的な生活」を送った。このオイフォーリオンの物語は、まず、ゲーテが現実には持ちえなかった家庭の風景を描いた家庭劇であったと柴田は考える。同時に、その背後に、ひとつの意味が隠されている。すなわち、オイフォーリオンは「美=ヘレナ」と「現実=ファウスト」との結び合いから生まれた詩であり、オイフォーリオンの悲劇は、自由を目指し、人間の限界を無視して高さを目指した詩が、現実のなかで行き着かざるをえない運命をあらわした寓意劇であるというのである。ゲーテにとって、このような詩の現実における運命を体現したのが、イギリスの詩人バイロンであった。彼は、オスマン・トルコからの独立を目指すギリシアの戦争に加わり、戦陣の中病死した。「現実」であるギリシア独立運動を、自らの肉体をもって『詩』の一部と化そうとした¹²⁾バイロンに対する哀悼劇でもあった、と柴田は考える。

IV

これまで、エッカーマンとの対話の中でゲーテがオイフォーリオンについて述べている事柄を中心に検討して、オイフォーリオンの物語には自由な詩の世界が現実の中で出会う悲劇的性格が見られることを確認した。しかしオイフォーリオン悲劇には、なお別の側面がある。ここで注目すべきは、エッカーマンとの対話でゲーテが使った「つねに無限なものを追い求める性格stets ins Unbegrenzte strebenden Naturell」ということばである。ゲーテはバイロンを指す言葉として使ったのであるが、「追い求めるstreben」という単語は、『ファウスト』のなかで主人公ファウストの本質を示す言葉として使われていることばである。従って、オイフォーリオン悲劇は、バイロンからさらに、ファウストとの繋がりを考える必要へと導かれるのである。

「天上の序曲」で天主der Herrは、メフィストーフェレスに対して、ファウストを「求め続けている限り、人間は踏み迷うものだEs irrt der Mensch so lang' er strebt.」(317行)と擁護した。周知のように、strebenは現代のような努力するという意味で使われていない。ある目標に向かって努力するのではなく、目標が定まらないなかで、しゃにむに「自分を全的に充たしてくれる何か」を求めことを意味する¹³⁾。そもそもファウストには終始一貫して、満ち足りた充足感が欠如している。彼は哲学、法学、医学、神学と当時の大学の全学部にまたがる研究を行なったが、その「代償は喜びなしの人生」(370行)であった。彼は「世界をそのいちばん奥深いところで束ねているものは何か」を知ろうとした(382-383行)。彼は地霊Erdgeistをも呼び出したが、自らの卑小さを痛感し、絶望へと突き落とされるだけであった。ファウ

ストは次のように独白する。

神々に似る俺ではない！もう肝に銘じて判った。／塵あくたを掘り返すみみずこそ似る俺なのだ／塵あくたを食らいつつ生き／さすらい人の足に踏みにじられて死ぬみみずだ。(652-655行)

地霊との出会いによって絶望の淵に落ち込むところを、ファウストは、助手のヴァーグナーが現場にたまたま入ってくることによって、救われた。彼は、「牢獄」(398行)のような書物と実験装置で身動きの取れないゴシック様式の書齋を離れて、キリストの復活を祝う日、ヴァーグナーとともに市の門の外にでた。夕日が赤く燃える中、ファウストは、ヴァーグナーに次のように語る。

お前は自分のうちにただひとつの衝動しか知らない。／いまひとつの衝動を決して覚えぬようにするのだな！／私の胸には ああ ふたつの魂が棲む！／そして互に自分の意志をつらぬこうと譲らぬのだ。／ひとつの魂は力強い愛の快樂が誘うままに／さそりの足さながらにこの現世にしがみつく。／今ひとつの魂は塵の地上を力強く蹴って／貴い祖先たちの棲む境界へと飛翔する。(1110-1118行)

後者の衝動については、ファウストは次のようにも語っている。

おお われに翼あれば 大地を離れ／太陽を追ってどこまでも 力の限り飛び続けたきものを！
／その時 空飛ぶ私を包む永遠の夕映えのなかで／静かなる世界が目の下遙かに横たわり／山々は火と燃え 谷間は深くしずまり／銀色にせせらぐ小川が金色の大河に流れ込むのが見えよう。
／
．．．．／精神の翼をはばたくは易しく／ 肉体の翼を得るは難い。／しかも 誰の胸のうちにも棲むのは／ひばりが青空高く姿も消えんばかりに上がり／声を限りにその歌をうたう時／椈の樹に覆われた峻しい山々の上を／一羽の鷺が翼を拡げ悠々と輪をえがく時／そして野を越え 海を越え／鶴がひたすら故里を目ざす時／われもまたあの如く 高く遠く飛びたきものを と願う心だ。(1074-1099行)

ファウストは、「あんなつまらぬ人間」(606、609行)はいないと軽蔑しているヴァーグナーと対比しつつ、自己をそのように規定した。これは一種の自己弁護であって、そのファウストの言葉をそのまま鵜呑みにして、ヴァーグナーには現世的な愛の快樂の衝動しかなく、ファウストには、この衝動とともに、高次の世界への憧れがある、と考えるのは危険である。また、「天上の序曲」でメフィストーフェレスが神に向かってファウストについて述べる次の言葉との整合性をもたらそうとするのも危険である。

あの阿呆の食うもの飲むものは もはや地上のものにはあらず／胸に醸し出され泡立つものからられて ひたすら彼方へと心こがれ／自分の気のふれ加減を半ば知ってはいながらも／天から手に入れたいの は よりぬきの美しい星々／地上からは この上なしの快樂のすべて／しかも遠くにあるもの近くにあるもの みんなかき集めたって／深く動かされたあいつの胸は満足しない。(301-307行)

ファウストが言う二つの魂は、天上を志向する魂と地上的快樂を求める魂ではない。メフィストーフェレスは、彼の立場から発言しているのであって、ファウストの心は満足することを知らないという指摘はあたっているものの、ファウストを正しく表現したものではない。ファウストは繰り返し、自分が天上への関心をもたないことを表明している。彼は伝統的な信仰ももたない¹⁴⁾。

では、二つの魂、二つの衝動は如何に解すべきか。ファウストによって痛烈に批判されているヴァーグナーはどのように見ていたのであろうか。彼はファウストの助手として、常日頃世間から離れて学者の道を歩んでいる。その営みを次のように説明する。

精神の喜びは／本から本へ 頁から頁へ 私たちを導いて飽かせません！／厳しい冬の夜も優しく楽しく／聖なる幸福に包まれた生活が凍える手足を暖めてくれ／更には ああ もし尊い羊皮紙の一卷をひもときでも致しますれば／天のすべてがわがところに降臨したかの思いでございます。(1104-1109行)

同時に、彼は自らの能力の限界を知っている¹⁵⁾。それ故、彼にとって重要なのは、日々の研鑽を通じて、世代から世代へと学術が受け継がれ(1060-1063行)、進歩していくことである。ヴァーグナーに見られるのは、現世内での理性的な営みの積み重ねである¹⁶⁾。そのようなヴァーグナーの立場からすると、ファウストの飛翔の夢は、「妄想」、「無謀な願い」である。さらにヴァーグナーにとって重要な点がある。この衝動のためにファウストは「大気にいる霊たちGeister in der Luft」に呼びかけざるをえなかった。自らはそのような衝動を実現する力をもたないからである。「金色にかすむ雲間より降りて／俺を新しい目くらむ生へと導いて行ってくれ！／俺を見知らぬ国々へ連れて行ってはくれぬものか／おお せめて魔法のマントがわが手にあって／俺を見知らぬ国々へ連れて行ってはくれぬものか！」(1120-1123行)ヴァーグナーはそのような霊の性格に関し、ファウストよりも適切に認識していた。ヴァーグナーによれば、それらは悪霊である。「彼らは折あらばひとに害を与えんと 耳を澄ませて折を窺い／われらの希望に耳傾けるかのごとくして われらを欺かんと待ちかまえている／彼らは天からの使いであるかの如く振舞い／欺く時もその言葉に天使のような優しさをこめる」(1138-1141行)。

以上のようなファウストとヴァーグナーとのやり取りから、二つの魂とは、現世内での日々の営みに満足する魂と、日常を超え出て行こうとする魂と考えることができる。前者には日常的な快樂などとともに、目標が定められた場合には一定の合理化の傾向も生じてくる。そこには理性的な知識欲が見られる。後者の場合には、目標が定まらず、次から次へと「現在」を超え出て行こうとする。ここでは快樂は、非合理的な様相を帯びてくる。苦痛と享樂が結びつく(1756、1766行)。ファウスト自身、ヴァーグナーから離れたとき、その衝動を「荒々しい衝動、制御を知らぬ行為への欲望」(1182行)と呼んだ。「追い求めるstreben人間」としてのファウストの本質は、この第二の衝動と深く関わっている。

第二の魂、飛翔への衝動については、さらに次のような特徴が認められる。第一に、この衝動は空間的には「遠くへ」そしてより顕著には、地上から離れて「より高く」昇って行こうとする飛翔への願いとなってあらわれる。地上からの、現世的なものからの離脱を特徴としており、理想主義的な側面をもっている。この衝動はより良いもの、より美しいものを求める動きとなって現われる。ファウストはメフィストーフェレスに対して、「高きを求めてやまぬ人間の精神eines Menschen Geist, in seinem hohen Strebenが／お前の一族にかつて理解できたためしがあったか」(1676-1677行)と言って誇った。しかし、メフィストーフェレスはもっとシニカルにこれを見つめている。「人間はバッタの足長野郎によく似ている。／

飛んでは跳ね 跳ねては飛びをくりかえすが／結局はすぐ草の間に落ち込んで 昔ながらの小唄をくりかえす」(288-290行)に過ぎない。第二に、この衝動は無限に自我を拡張していく。ファウストは次のように語っている。「人類に定められたあらゆるものを／俺は自分のうちに味わい尽す／人間の善も悪もわが心で知り尽くし／人間の仕合せも悲嘆もわが胸に積み重ね／自分のおのれをそのまま人類のおのれへと拵げ／そして遂には人類の破滅とともに俺もまた砕け散るのだ。」(1770-1775行)これに対して、メフィストーフエレスは、幾千年にもおよぶ自らの経験では、「この古いパン種を消化し切れた人間には、お目にかかったことはありませんぜ」(1779行)と応じる。第三にこの「自我の無限拡張衝動」(柴田翔)は、悪魔メフィストーフエレスが提供するマントがなければ不可能な営みであった。ヴァーグナーに対して「貴い祖先たちの棲む境界へと飛翔する魂」を誇ったファウストは、その数行後で「せめて魔法のマントがわが手にあって／俺を見知らぬ国々へ連れて行ってはくれぬものか！」と嘆く。彼は飛翔を望みつつ、それが自らの力によってはできぬこともよく自覚しているのである。この自覚は、その願い、衝動が強いだけ、深刻な絶望となる。ファウストはメフィストーフエレスに対しては、自らのもっとも絶望的な思いを告白した。「わが胸に住む あ的神は／俺のなかに深い望みを呼び起こし／俺の諸々の力をすべて支配しながらも／外部世界に向っては何ひとつ働きかけることができない。／地上に生きることは重荷だ／死こそ望ましく 生はわが憎しみだ。」(1566-1571行)この深刻な告白に対しても、メフィストーフエレスは、ファウストが地霊と出会った時に自殺しなかったことを皮肉る。このあたりが『ファウスト』のおもしろい点である。それはともあれ、ファウストは、メフィストーフエレスの助けをえることになる。二人が発発するとき、メフィストーフエレスが口にする、「必要なのはマントだけ／拵げればたちまちにして われら運び空を飛びます。」(2065-66行)という台詞は、印象的である。ファウストの悲惨さは、それがなければ飛ぶことが出来なかったメフィストーフエレスのマントが、本当は実質のないものであったことである。第四に、しかしメフィストーフエレスによって可能となるこの営みは、彼の大伯母がエデンの園でアダムとエバに対して行なったような神への反逆という性格をもたない。彼は、入学したてのファウストに助言を求めてきた学生の訪問帳に、「ナンジラ神ノ如クナリテ 善悪ノベツヲ知ルニ至ラン」と、創世記3章5節の言葉を記すが、そこには創世記の言葉がもっていたような神との緊張関係は感じられない。メフィストーフエレスは天上の序曲の参考となった『ヨブ記』に登場するサタンとも異なっている。『ヨブ記』のテーマは、人はなぜ神を信じるのか、苦難とは何か、である。そもそも『ファウスト』の「天上の序曲」に登場する天主は、旧約聖書におけるような人を裁き罰し赦す神ではなく、世界の予定調和をもたらす存在であった。第五に、それゆえファウストの自我がぶつかるのは、神ではなく、他者である。ファウストの衝動は、第一部においては、グレートヒェンの悲劇を生みだし、第二部においては老夫婦フィレモンとパウチスの幸福を焼き尽くすことになる。

V

「IV」で述べたようなファウストの衝動をオイフォーリオンにも見出すことができる。まず両者に共通しているのは、飛翔へのやみがたい衝動である。

世界の空の 果ての果てまで／高く高く昇って行くのが／もう抑えることのできない／ぼくの望みだ。(9713-9716行)

こう願うオイフォーリオンにはどのような特徴が見られるのであろうか。ヘレナとファウストはそのよ

うな「あまりに激しい衝動heftige Trieb」(9740行)を抑えるようにうったえる。ここではファウストは完全に、以前のヴァーグナーの立場に立っている。

上へ上へと志向するなかで、オイフォーリオンは徐々に姿を変えていく。彼は合唱の少女を捕まえようと歌い踊りながら、「自我の無限拡張衝動」の本質を現わしてくる。「俺が漁師で／お前たちは獲物の獣だ。／・・・簡単に手に入ったものなど／腹が立つ。／無理やり奪ったものだけが／ぐんと嬉しいものなのだ。」(9771-9784行)当然両親は「何という乱暴さだ」と非難する。そしてついにもっとも強そうな少女を捕まえる。「頑固なチビを捕まえたぞ／無理強いこそが俺の楽しみ。／俺の快樂 俺の欲望の満足に／嫌がる胸を押さえ込み／嫌がる口に唇おしつけ／俺の力と意志を知らせてやる。」(9795-9799行)これに対して少女は、「放すのよ！ laß mich losこの身体にだって／勇氣と力はあるんだから／女の意志だって男と同様／そう簡単には挫けはしない。」(9800-9803行)と答えるが、それは、牢屋でファウストに対して語るグレートヒェンの「放して！ laß mich 厭！無理強いだけは厭なの！／掴まないで 人殺しみたいに乱暴に！」(4576-4577行)を連想させる。やがて少女は炎となって燃え上がり高く昇っていく。オイフォーリオンも名残の炎を振り払いながら、岩から岩へと登っていく。

オイフォーリオンは言う、「もっと高く 登らずにはいられないんだ／もっと遠く 見渡さずにはいられないんだ。」(9821-9822行)平和に暮らすことをすすめる合唱や両親が見つめるなか、オイフォーリオンは青年戦士へと姿を変え、自由を求めて戦う人々の中に自らも加わりとうとする。上へ上へと昇りながら、「貴き名声への道」、「苦難に満ちた世界」に焦がれるオイフォーリオンと、「静かな田舎」で平和に暮らし、「希望に生きる仕合わせ」を願う両親や合唱との間には、ファウストがヴァーグナーに語ったあの二つの魂、二つの衝動の対立が立場を変えて現われている。やがてオイフォーリオンは語る。「聞こえませんか 海の上のどよめきが？／谷から谷へ そのどよめきが昇ってきて／戦塵が舞い 波が打ち寄せ 戦士たちが相討って／押し寄せては押し返され 苦痛と苦悩が襲い掛かる。／そして死こそが／わが掟——。／それはもう自明のことなのです。」(9884-9890行)そしてその直後に彼は空中に身を躍らせ、死に至るのである。オイフォーリオンの変容していく姿は、自己拡張がたどり着く姿をあらわしている。

ところでオイフォーリオン、ファウストとヘレナ、そして合唱のやりとりを静かにじっと見ていた一人の人物がいる。老女ポルキアスである。彼女は、ファウストとヘレナの出会い、結婚生活、オイフォーリオンの誕生、そしてオイフォーリオンの死までをじっと見続けてきた。オイフォーリオンが落下して死亡し、合唱がその葬送の歌を歌ったのち、ヘレナはその衣裳とヴェールをファウストの胸に残して、冥府の世界へと消えていった。その時、ポルキアスはファウストに、高きをめざして進むよう、励ます。「尊く測り知れない あの女神 [ヘレナ] の寵愛を力として／おのが身を高く持せよ。お前の生命が続く限り／その面影がお前を 世の常なるものすべてを超えて／たちまちに高き靈気の間へと運び上げるだろう。／われらはいずれ ここから離れた遠く遠い場所で また会おう。」(9950-9954行)そして第三幕が終わったところで、ポルキアスは仮面とヴェールを脱ぎ捨てて、その正体をあらためて観客にしめす。実は、メフィストーフェレスが変装していたのである。

上へ上へと昇って行こうとするオイフォーリオンの姿には、詩の現実化の記念碑としてのバイロンの面影とともに、ファウストの姿も認めることができるであろう。もちろん、オイフォーリオンはファウストの分身ではあっても、ファウストそのものではない。ファウストの自己拡張衝動の空間的横への広がりとそのスケールの大きさは認めることができない。しかしそれだけに、空間的な上への志向性もつ理想主義的側面(自由への希求)と、それが他者への抑圧に変質し、さらには自己をも破滅に追いやる可能性を秘めていることは、いっそうシャープに見ることができる。同時に、墜落後、「肉体は消え、光輪が彗星

のように空に昇った」オイフォーリオンは、ファウストの救済をも予示しているのかもしれない¹⁷⁾。

注)

- 1) 『ファウスト』は、Johann Wolfgang Goethe, *Faust*, hrsg.v. Albrecht Schöne, Deutsche Klassiker Verlag im Taschenbuch Band 1, 2005に基づく。日本語訳は、ゲーテ『ファウスト』（柴田翔訳、講談社、2000年、第二版）を主に使用した。その他、手塚富雄訳『ファウスト 悲劇』（中央公論社、1980年）や、井上正蔵訳『ファウスト（第一部、第二部）』（『愛蔵版世界文学全集7ファウスト 若きヴェルテルの悩み他』所収、集英社、1976年）を参考にした。『ファウスト』理解のためには、柴田翔『ゲーテ「ファウスト」を読む』（岩波書店、1985年）や高橋義孝『ファウスト集注』（郁文堂、改訂第二版、1984年）、Hans Arens, *Kommentar zu Goethes Faust I/II*, Heidelberg, 1982/1989; Rudolf Eppelsheimer, *Goethes Faust. Das Drama im Doppelreich*, Stuttgart, 1982; Johann Wolfgang Goethe, *Faust Kommentare*, hrsg.v. Albrecht Schöne, Deutsche Klassiker Verlag im Taschenbuch Band 1, 2005などを参考にした。その他、オイフォーリオンについては、新井靖一「『Faust』第II部におけるオイフォーリオン形姿の解明」『比較文学年誌』（早稲田大学比較文学研究室）1号、1965年、参照。
- 2) ポリフォニーについては、ミハイル・バフチン『ドストエフスキーの詩学』（望月哲男、鈴木淳一訳、筑摩書房、ちくま学芸文庫、1995年）参照。
- 3) Johann Peter Eckermann, *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens*, hrsg.v. Fritz Bergermann, 1.Band, Insel Taschenbuch, 1981, S.355f. エッカーマン『エッカーマンとの対話』（中）（山下肇訳、岩波文庫、1979年）、148-149頁。
- 4) Mein lieber Sohn an dir hab ich Gefallen. ルター訳新約聖書では、例えば、マタイ福音書3章17節、Dis ist Mein Lieber Son, An welchem ich wolgefallen habe. D.Martin Luther, *Die gantze Heilige Schrift Deutsch 1545*, hrsg.v. HansVolz unter Mitarbeit von Heinz Blanke, Bd.2, München, S.1971.
- 5) J.P.Eckermann, *op.cit.*, S.237. 『エッカーマンとの対話』（上）（山下肇訳、岩波文庫、1980年）、326頁。
- 6) J.P.Eckermann, *op.cit.*, S.134. 『エッカーマンとの対話』（上）、184頁。
- 7) J.P.Eckermann, *op.cit.*, S.138. 『エッカーマンとの対話』（上）、188頁。
- 8) J.P.Eckermann, *op.cit.*, S.136. 『エッカーマンとの対話』（上）、186頁。
- 9) J.P.Eckermann, *op.cit.*, S.136. 『エッカーマンとの対話』（上）、186-7頁。
- 10) たとえば、Johann Wolfgang Goethe, *Faust Kommentare*, hrsg.v. Albrecht Schöne, S. 621f.; Hans Arens, *Kommentar zu Goethes Faust II*, S. 720ff.
- 11) 柴田翔、前掲書、314頁。
- 12) 同上、313-314頁。
- 13) 同上、22頁。
- 14) たとえば、ファウストは次のように語っている。「天上の領域を目指そうと俺は思わぬ」（767行）。
- 15) 「ヴァーグナー ああ！学術は短く／われらが人生は短しと申します。／厳密なる学びの道に身をささげておりますと／何やら頭も胸も不安に重くなって参ります／原典にまでさかのぼろうと努めましても／そのための勉強は患難辛苦／道半ばに至る前にも／あわれ私どもの寿命はおしまいでございます。」（558-565行）
- 16) ファウストはこの立場に対して、その俗物主義を批判し、進歩主義を批判する。「祖先から遺された

ものは／自らの手で獲得し直してこそお前のものとなる。／利用できぬものはいたずらな重荷になるのみ／瞬間瞬間が新たに創り出して行くものだけが 今この瞬間が利用できるものなのだ。」(682-685行)

17) Rudolf Eppelsheimer, *op.cit.*, S. 351.

(本論は、2008年度香川大学生涯学習教育研究センター公開講座「人間における悲劇的なものの意味」における講義をもとに書かれたものである。)